

『土蜘蛛草紙』における漢文学の受容

白 溪

はじめに

本論文で扱う『土蜘蛛草紙』は、東京国立博物館所蔵の絵巻一軸である。成立期は十四世紀前半と推定され、現存する土蜘蛛絵巻諸本の中では最古の伝本である。付属の寛延二年の土佐光芳の極書に、「先祖左近将監長隆真筆」とあり、同じく添書の極めには「絵土佐長陸筆、詞書兼好筆」とある。また、『倭錦』や『図画一覽』にも同様の記載があり、『古画目録』等には土佐光顕筆とある。しかしこれらは根拠を欠く上時代的にもズレがあり、作者は未だ不明である⁽¹⁾。

さて、『土蜘蛛草紙』と漢文学との繋がりについて、これまでに二つの面から研究が行われてきた。

一つは絵巻の詞書の表現や一場面のストーリー構成から、漢文学の受容を分析する研究である⁽²⁾。中世には「四部ノ書」とよばれる幼学書が存在し、すなわち『千字文』（または「新楽府」・『百詠』・『蒙求』・『和漢朗詠集』である⁽³⁾。黒田彰氏の研究によって『土蜘蛛草紙』の詞書に『和漢朗詠集』と白楽天の諷諭詩五十首からなる「新楽府」（金沢文庫本『白氏文集』巻三・四に収録）の詩句の取入れが多く見られる上、ストーリー

ーの構造レベルで『和漢朗詠集』の古注釈の影響が見られることがわかった。この点について黒田氏は、「草子制作の場における四部の書等、幼学の参画が修辭をこえて、作品内部の造型にまで、その影響の及ぶことを示している」と述べた。またこの絵巻には中世幼学書以外に、白楽天の「琵琶引并序」と「長恨歌」（共に金沢文庫本『白氏文集』巻十二に収録）が受容されていることも黒田氏によって指摘された。

もう一つは退治の対象である、山蜘蛛という妖怪に注目した研究である⁽⁴⁾。『土蜘蛛草紙』の絵巻を収めた箱に「土蜘蛛巻物」と書いてあり、箱の中の明治十六年の譲渡証に「土蜘蛛双紙巻物」とある⁽⁵⁾。しかし絵巻の詞中には「山蜘蛛」の語はあっても「土蜘蛛」の語の使用例はないため、当初の題ではない可能性がある⁽⁶⁾。上代文献に登場する異民族の「土蜘蛛」があくまで人間であるのに対し、山蜘蛛は巨大な蜘蛛の姿をした妖怪であり、両者は別系統である。蜘蛛の妖怪が登場する説話は、この『土蜘蛛草紙』が初見である。中世以前希薄だった妖怪としての蜘蛛のイメージは漢文学を経由して形成されたのではないかという推測のもと、渡瀬淳子氏は漢籍の類書である『太平御覽』（治承三年日本に伝来）と『太平広記』（室町には

日本に伝来」を調べた。その結果、この二つの類書に蜘蛛の妖怪にまつわる怪異譚が幾つか収録されており、漢文学の世界では古くから蜘蛛の妖怪が登場していたことがわかった。そのうち、「山蜘蛛」という名が見られる話や、化け蜘蛛を退治した後、火を放つという筋書を持つ話もある。渡瀬氏は『土蜘蛛草紙』の山蜘蛛を切った後の、「かのところに、火をかけて、やきはらひつ」という頼光と綱の行動は、このような中国の蜘蛛の妖怪退治譚から影響を受けているのではないかと指摘した。先行研究で具体的に『土蜘蛛草紙』のどの場面でのどのような漢文学の受容が指摘されたかは、論文の最後の表一にまとめている^①。筆者はこのような研究成果を踏まえて、『土蜘蛛草紙』における漢文学の受容について述べていきたいと思う。

『土蜘蛛草紙』のストーリーは、頼光と綱が北野蓮台寺の辺りで空を飛ぶ髑髏を見かけることから始まる。その髑髏の後を追って、二人は神楽岡にある一軒の古家に辿り着く。古家周辺の風景は、「西に紅錦^②」の山あり、南に碧瑠璃の水有^③と描かれている。絵巻の冒頭部分に「神無月廿日あまりの比」とあるため、妖怪退治は晩秋もしくは初冬に行われたことがわかる。「西に紅錦^④」の山あり、南に碧瑠璃の水有^⑤という一文は、このような季節設定にふさわしい風景を表しているはずである。瑠璃のような池水は秋・冬の一風景として、漢詩文の世界では比較的よく詠まれる^⑥。

① 『和漢朗詠集』 上 秋 紅葉

黄纈繡林寒有葉

碧瑠璃水浄無風

(白楽天)

洞中清浅瑠璃水

庭上蕭条錦繡林

(慶滋保胤)

② 『本朝文粹』 卷第十 詩序三

「晩秋過參州藥王寺有感」

(前略) 前有碧瑠璃之水、後有黄纈繡極之林。(略)

(慶滋保胤)

「冬日陪左相府少侯書閣同賦落葉波上舟」

(前略) 閣東有碧瑠璃之水、水辺有紅錦繡之林。(略)

(慶滋保胤)

③ 『本朝麗藻』 下 仏事部

「秋日遊東光寺各成四韻」

籬下寒花紅錦繡 池中秋水碧瑠璃

(慶滋為政)

④ 『本朝無題詩』 冬 付歳暮

「初冬書懷」

黄花移影瑠璃水

紅葉散光錦繡林

(大江匡房)

『土蜘蛛草紙』の「南に碧瑠璃の水有^⑤」という風景描写には、このような漢詩文が取り入れられていることがわかる。

さて、瑠璃のような池水が詠まれた例として挙げた漢詩文のうち、③を除けば、すべて木の葉が色付いた林が合わせて詠まれている。「黄纈繡」の林は、まるで纈繡染の織物のような黄葉の林を指し、「錦繡」・「紅錦繡」の林は、錦を織りなしたような紅葉の林を指す。さらに「錦繡」・「紅錦繡」という言葉から、『土蜘蛛草紙』の「西に紅錦^④」の山ありの「紅錦^⑤」の山」が「紅錦繡の山」であることが推測できる。では、「紅錦繡の山」とは、一体どのような風景であろうか。謡曲「江口」では、春の情景として「紅錦繡の山」が取り上げられている。

(前略) 紅花の春のあした、紅錦繡の山、装ほひをなすと見えしも、夕べの風に誘はれ、黄葉の秋の夕べ、黄纈繡の

はやし、色を含むといへども、(略) 九

『和漢朗詠集』「上、春、春興」には、「著野展敷紅錦繡 当天遊織碧羅綾」という小野篁の詩句が収録されている。謡曲「江口」で紅の花咲く春の山がまるで紅の錦繡で盛装したようだと描写されているのは、春の野に草花が咲き乱れている様子が刺繍を施した紅の錦——「紅錦繡」に喩えられている。「著野展敷紅錦繡」に由来する。以上から、「紅錦繡」という言葉は本来紅の花と紅葉、両方を描写するのに使われることがわかる。そして「紅錦繡」の如く咲く花は、必ずしも春の情景を表すとは限らない。「碧瑠璃の水」で挙げた漢詩文の例③は、秋の詩にもかかわらず、「籬下寒花紅錦繡」とあるように、紅葉ではなく、垣のもとに咲く花々を「紅錦繡」に喩えている。『土蜘蛛草紙』の古家の西側にある「紅錦繡の山」は、紅葉の山または花咲く山であることがわかる。

さて、『土蜘蛛草紙』の作者は古家周辺の風景を描いた後、古家の様子について、「庭には蘭菊の野となり、門は禽獣のすみかとなれり」と記した。これは長安の古い空き家を詠んだ、白楽天の「凶宅」の「梟鳴松桂枝 狐藏蘭菊叢」^(十)という句を連想させる。いよいよこの古家に入った頼光は、まず台所で一人の老女と出会い、身の上話を聞かされる。黒田氏はこの老女の台詞に、白楽天の「琵琶引并序」の影響が見られることを指摘した。

「琵琶引」は「琵琶行」とも題され、白楽天が九江郡の司馬に左遷された翌元和十一年の秋に成立した作品である。湓浦口で客を送る夜に、琵琶の妓女の素晴らしい演奏と悲しい身の上を聞いたことが、この長編の詩が詠まれたきっかけである。こ

の作品からは同じく、「天涯淪落」という境遇に置かれていた白楽天の、妓女に対する深い同情と共感が読み取れる^(十一)。

さて、古家の一室で一晩過ごした頼光は、様々な妖怪に出会った。暁近くになった頃、頼光の前に美女に化けた山蜘蛛が登場する。

(前略) あやしき足おとにて、むかひたる障子
五寸はかりほそめてしは／＼はたかくれたり。そのさま、
春の柳の風にみたれたるよりもこまやかなり。つく／＼と
たちてひきあくるを見るほとに、やう／＼あゆみきたりて、
いたくけちかくはあらてたゝみにあこほれる程、まつな
けあり。(略)

「琵琶引」の琵琶を弾く妓女が登場する場面は、以下のように記されている。

千呼萬喚始出来、猶抱琵琶半遮面。

轉軸撥絃三兩聲、未成曲調先有情。^(十二)

(千呼萬喚して始めて出で来るも、猶ほ琵琶を抱きて半ば面を遮る。

軸を轉じ絃を撥すること三兩聲、未だ曲調を成さざるに先づ情有り。)

このように、妓女は琵琶で顔を半分隠しながら客人一同の前に姿を現したのである。一方『土蜘蛛草紙』の美女は頼光の部屋の前に着いて、まず、五寸ばかり開いた障子に「はたかくれたり」とある。観智院本『類聚名義抄』によれば、「ハタカクル」は「半面」という言葉に付けられた訓である^(十三)。唐代の文人張鷟が書いた『遊仙窟』には、「余讀詩訖、舉頭門中、忽見十娘半面」^(十四)という一文が見られる。これは崔十娘からの

返信で対面を拒まれた張文成が不意に、門の中の十娘の半分隠れた顔を見たという場面を表し、醍醐寺本『遊仙窟』では以下の通りに訓読されている。

余詩を讀し訖りて、頭を門中に擧ぐ、「または「頭を擧げて門中に」忽ちに十娘が半面とはたかくれたるを見つ

このように、「ハタカクル」は「半面」という言葉を文選読みするのに使われ、半分隠れている状態を表す。

和文学の世界では、様々な作品に「ハタカクル」という言葉が使われている。

① 『蜻蛉日記』中巻

(前略) ことみはつつむことなくさし歩みて、ただ入りに入れば、わびて几帳ばかりを引き寄せて端隠るれど、なにのかひなし。

② 『枕草子』「鳥は」の段

(前略) 郭公は、なほさらに言ふべき方なし。いつしかしたり顔にも聞えたるに、卯の花、花橘などに宿りをしたるはたかくれたるも、ねたげなる心ばへなり。

(略)

③ 『源氏物語』「松風」

(前略) (明石の君) なかなかもの思ひ乱れて臥したれば、とみにしも動かれず。(中略) しぶしぶにゐざり出でて、几帳にはた隠れたるかたはら目、いみじうなまめいてよしあり、

「真木柱」

(前略) 大将のおはせぬ昼つ方渡りたまへり。女君、

あやしうなやましげにのみもてないたまひて、すくよかなるをりもなくしほれたまへるを、かく渡りたまへればすこし起き上がりたまひて、御几帳に、はた、隠れておはす。(略)

④ 『小町集』

(前略) しどけなきねくれた髪をみせじとてはた隠れたるけさの朝顔(略)

①『蜻蛉日記』の用例と③『源氏物語』の用例では、いずれも男女が対面する場面が描かれている。思い悩んで、訪ねてきた男性に会いたくない女性の几帳に半ば隠れている様子を描写するのに、「ハタカクル」が使われている。②『枕草子』の用例では、卯の花や花橘の木に止まった郭公の「はたかくれたる」様子が、「ねたげなる心ばへなり」と称賛されている。類従本『小町集』の和歌では、女性が寝乱れた髪を見せまいと、姿を半分隠している情景が詠まれている。

以上から、「ハタカクル」という動詞は門や几帳の向こう側に半分隠れている状態を表すのに使われ、『土蜘蛛草紙』の美女は障子で姿を半分隠していたことがわかる。登場場面において障子で姿を半ば隠す『土蜘蛛草紙』の美女と、琵琶を抱えて顔を半分隠す妓女は、半ば隠すという動作が共通しており、「琵琶引」の影響が見られる。また、部屋に入ってきた『土蜘蛛草紙』の美女は、「やう／＼あゆみきたりて、いたくけちかくはあらで」とあるように、ゆつくりと頼光に向かって歩くけれど、そこまで近くには寄つてこず、どこか遠慮がちで恥じらっている様子である。このような人物像も、「琵琶引」の客人一同が千呼萬喚してやっと姿を現す妓女と重なるところがある。さら

に、『土蜘蛛草紙』の作者は美女の「たゞみにゐこはれる」様子を、「まつなさけあり」と評しているが、これは白楽天の妓女の試し弾きに対する、「未成曲調先有情」という評価を連想させる。ところで、「先有情」は中世頃どのように訓読されていたのだろうか。

『源氏物語』や『枕草子』に「琵琶引」の影響が見られるように、日本では古くから「琵琶引」が愛誦されたが、必ずしも「長恨歌」と並ぶほどに特別に愛誦されたわけではなかった。しかし室町頃になると、俄かに「琵琶引」を「長恨歌」と並べ読む風潮が生じた。これは、『古文真宝』の伝来と関係している。

『古文真宝』は室町初期に禅僧によって輸入されたと推定されている。宋までの代表的な文十七類を集めた後集と、宋以前の古体の詩十一類を集めた前集からなるこの書は、禅林で模範詩文集ないし一通りの教養書として流行した。『古文真宝』がよく講ぜられていたことは、室町末期まで禅僧の手によって少なくとも六種の古文真宝抄が作られていたことから窺える。「長恨歌」と「琵琶引」はそれぞれ『古文真宝』前集の巻八、巻九に収録されている。禅僧社会における『古文真宝』の愛好によってこの二篇に注目が集まり、「長恨歌」と「琵琶引」だけを取めたテキストや抄物の出現を促した^(十七)。

竜門文庫に、博士家の清原宣賢が講義のテキストとして自ら書写した『長恨歌并琵琶行』が所蔵されている。川瀬一馬氏は本文の筆跡を宣賢（天文十九年七月十二日、七十六歳死）壮盛の頃の筆とし、訓点は後に（六十歳を超えてから）加筆したと判断した^(十八)。一方、京都大学附属図書館の清家文庫には清原

宣賢自筆の『長恨歌并琵琶行秘』が所蔵されている。これは、巻末に「天文十二年八月十五日十六日 於万里小路亭講之」と自署してあるように、宣賢の手控え・草稿本という性格を持つ仮名抄である^(十九)。天文十二年以前、あまり時差のない頃に書写されたと思われる。竜門文庫本と京大本は同じく宣賢自筆本にもかかわらず、前者の「長恨歌」「琵琶引」の本文が『白氏文集』系統に属するのに対し、後者は「古文真宝前集八」「古文真宝前集九」と明記してあるように、『古文真宝』系統に属する^(二十)。竜門文庫本と京大本では両方とも、「先有情」が「先有レ情」——「マツナサケアリ」と訓読されている^(二十一)。この点から、『土蜘蛛草紙』の作者が「琵琶引」の言い回しを取り入れたことがわかる。

さて、「琵琶引」の妓女が琵琶で顔を半分隠す「猶抱琵琶半遮面」という句は、竜門文庫本と京大本では「猶琵琶ヲ抱テ、半バ面ヲ遮」^(二十二)と訓読されている。『土蜘蛛草紙』の美女が障子で姿を半分隠す動作が、琵琶の妓女の「半遮面」からヒントを得たとすれば、絵巻の作者はなぜ「半ばさし隠す」ではなく、「はたかくる」を使つたのだろうか。

「サシカクス」は観智院本『類聚名義抄』では、「遮」の字に当てられた訓である。一方、『日本書記』『雄略記』の「大斧手以楯翳物部目連」という一文では、「翳」の字が「サシカクス」と訓読されている^(二十三)。また『大毗盧遮那成佛經疏』の巻第八では、「其傘當隨身上下而以蔭之」という一文の「蔭」の字に、「サシカクス」の訓が付けられている^(二十四)。「遮」・「翳」・「蔭」の三文字から、「サシカクス」という動詞は何かで覆い隠す動作を表すことがわかる。

つづいて、和文学の世界では「サシカクス」はどのように使われているか、見ていきたいと思います。

① 『蜻蛉日記』 下巻

〔前略〕 簾巻きあげ、下簾おし挟みたれば、おぼつかなきこともなし。この車を見つけて、ふと扇をさし隠して渡りぬ。(略)

② 『枕草子』 「なまめかしきもの」の段

〔前略〕 をかしげなる童女のうへの袴など、わざとはあらで、ほころびがちな汗衫ばかり着て、卯槌・薬玉など長くつけて、高欄のもとなどに、扇をさし隠してゐたる。(略)

「宮にはじめてまゐりたるころ」の段

〔前略〕 行幸など見るをり、車の方にいささかも見おこせたまへば、下簾引きふたぎて、透影もやと扇をさし隠すに、なほいとわが心ながらもおほけなく、いかで立ち出でしにかと、汗あえて、いみじきには、何事をかはいらへも聞えむ。(略)

③ 『源氏物語』 「夕霧」

〔前略〕 さすがに何心もなうさし来たるに、まばゆげにわざとなく扇をさし隠したまへる手つき、女こそかうはあらまほしけれ、それだにえあらぬを、と見たてまつる。(略)

④ 『源氏物語』 「横笛」

〔前略〕 「人も見ず。まろ顔は隠さむ。なほなほ」とて、御袖してさし隠したまへば、いとうつくしうて率てたてまつりたまふ。(略)

このように、和文学の世界では「サシカクス」は多くの場合、扇や袖で顔を覆い隠す動作に使われることがわかる。妓女が抱えている琵琶で顔を覆い隠している情景を表すのに「さし隠す」はふさわしいが、『土蜘蛛草紙』の美女は障子の向こう側に隠れているため、「半ばさし隠す」ではなく「ハタカクル」のほうが適切である。『土蜘蛛草紙』の美女が登場する場面において、「琵琶引」の妓女の顔を隠す動作が受容されながら、「半ばさし隠す」が「はたかくる」に直された理由はここにあると思う。

以上の調査から、『土蜘蛛草紙』では台所の老女の台詞ばかりでなく、美女の登場場面にも「琵琶引」が受容されていることがわかった。そしてこのような「琵琶引并序」の積極的な取入れは、室町期に『古文真宝』が流行するにつれて「琵琶引」が「長恨歌」と同等の地位を獲得してゆく背景と無関係ではないだろう。

さて、頼光の部屋に現れた美女は、夜明け頃に帰る素振りを見せたが、豹変して頼光に襲い掛かった。攻撃を始める直前の美女の様子は、以下の通りである。

〔前略〕 (美女) かみをまへへ、かいとりて、燈をにらまへたる眼、すきうるしを、させるににたり。火のひかりに、かゝやきあひたり。(略)

このように、美女は髪を掻き上げて灯を睨み、その眼はまるで漆を点したようで、灯と輝き合っている。人の眼と漆を関連付ける描写は、和文学では見られない。一方、漢文学では「眼如点漆」という表現があり、出典は南朝宋の劉義慶の『世說新語』である。『世說新語』には後漢から東晋までの名士の様々

な逸話が記されており、その中の「容止篇」に、「眼如點漆」という表現が見られる。

(前略) 王右軍見杜弘治、歎曰、面如凝脂、眼如點漆。此神仙中人^(二十五)。(略)

(王右軍、杜弘治を見て、歎じて曰く、面は凝脂の如く、眼は點漆の如し。此れ神仙中の人なり、と。)

「此神仙中人」とあるように、この段落では「眼如點漆」は、杜弘治の神仙に見紛うほどの容貌を描写するのに使われている。『蒙求』の「弘治凝脂」では、杜弘治の容貌について『世説新語』とほぼ同様の記述が見られる。

晋杜艾字弘治、成恭皇后父也。性純和美容容。有盛名於江左。王羲之目之、膚若凝脂、眼如點漆、此神仙人^(二十六)。(略)

また、『藝文類聚』の卷四十七「職官部三 司空」に、「杜生之凝脂點漆」^(二十七)という記述が見られる。『初學記』卷十九「人部下」の「美丈夫」、つまり美男子の項目でも「凝脂點漆」が挙げられ、解釈に杜弘治に関する記事が載せられている^(二十八)。このように、漢籍では固体の脂のような白く透き通る肌と、黒い漆を点したような漆黒の眼を合わせ持つことが美貌と見なされ、眼を「点漆」に喩える手法はさほど珍しくないことがわかる。『土蜘蛛草紙』の美女の眼がまるで漆を点したようだと描写されているのは、このような漢文学の手法を取り入れた結果だと言えよう。

さて、漢籍では「点漆」の「漆」は黒い漆を指すのだが、「燈をにらまへたる眼、すきうるしを、させるににたり」とあるように、『土蜘蛛草紙』では透明な「透き漆」に変わっている。そして、「火のひかりに、かゝやきあひたり」とあるように、

透明な漆を点したような光沢のある眼は灯の光を反射して輝き出す。絵巻の作者にとって美女の豹変する様を描くのに重要なのは、むしろ目が光る情景であり、それに合わせるために、本来美しい眼を形容する「点漆」の漆の色が変えられたのである。それにしても、美女が豹変する様を描くのに、絵巻の作者はなぜ眼が光るという情景を思いついたのだろうか。

この絵巻では、人物の眼が光を放つ場面はもう一つ存在する。夕方頃になると、頼光の前に様々な妖怪が現れた。

(前略) いひしらぬいるひ、いきやうのものとも、いくらといふかすをしらす、あゆみきたれり。(中略) 頼光、とほし火のかたを見やるに、その眼白毫のことし。□みな一度にとうとわらひて、障子をひきたてゝさりゆきぬ。(略)

このように、灯を見やる頼光の眼が白毫のように光り出すと、妖怪はみな恐れて逃げさった。この場面では、光る眼は頼光が妖怪を撃退する手段として描かれているが、作者はいかにして、この発想を得たのだろうか。

すでに紹介したとおり、先行研究では『太平御覧』と『太平広記』の二類書が絵巻作成の際に参考書として用いられた可能性が指摘された。これを受けて、筆者は『太平御覧』に収録されている、光る眼にまつわる記事を調べた。『太平御覧』「人事部七」には「目」という項目があり、次の二つの記事が見られる。

① (前略) 琅琊王目光弈弈、數歩射人。向者暫對、不覺汗出。(三國典略)

② (前略) 黯開城、欲殺之。子路目如明星之光曜、黯不

能前。謂曰、畏子之目、願覆之。『論語隱義』

①の記事で記された琅琊王の目の光は人を射るようで、それに向かう者は思わず冷や汗をかいてしまうほどだと言う。②の記事では子路を殺そうとした黯が、彼の目が輝くのを恐れて近づくとができなかつたと書かれている。このように、漢文学では光る眼に対して、相手に威圧感と恐怖を与えるという認識が存在していたことがわかる。『土蜘蛛草紙』で美女が豹変する様を描くの目に光る情景が選ばれたのも、妖怪達が頼光の光る目に恐れをなし、一斉に退室する場面が生まれたのも、このような漢文学の認識を受容した結果ではないだろうか。

以上の調査から、『土蜘蛛草紙』では蜘蛛の妖怪のイメージだけでなく、光る目にまつわるエピソードにも漢籍の類書からの影響が見られることがわかった。ちなみに「点漆」の記事もまた『太平御覧』では、「目」の項目を含めた六つの箇所それぞれ異なった書物から引用されている。一方、原典の『世説新語』に関しては、『性霊集』に空海の「勅賜の世説が屏風、書し了つて獻ずる表。一首」が収録されており、「日本国見在書目録」の小説家に「世説十 宋臨川王劉義慶撰劉孝標注」という記録が見られる。また『菅家文草』に「相府文亭、始讀世説新書。聊命善酒、同賦雨洗杏壇花。應教一首」があり、『江談抄』の『世説一卷私記』は紀家・善家相共に累代の難義を釈せられし書なり」という記述から、当時注釈書まで作られていたことがわかる。このように、『世説新語』は平安朝にはすでに広く読まれていた^{三十}。そして『実隆公記』に見られる『世説新語』に関する記録から、この書が中世になってもなお読まれていたことが窺える。

① (前略) 建仁寺青松軒自勢州傳言侍者僧栴首座来、世説新語三冊全被惠之。不慮之芳情、秘藏無極、以書狀謝遣之了。(略) (永正四年三月十二日条)

② (前略) 抑徳昌長老於江州山上去十四日入滅、八十三歳云々。予自少年知已也。先年稱遺物被送世説新語、可謂不朽之珍也。於東山随分之尊宿也。可惜々々^{三十一}。

(永正八年四月十九日条)

以上から、絵巻の作者が直接『世説新語』から「点漆」の表現を取り入れた可能性があることがわかる。前述したとおり、中世幼学書である『蒙求』の「弘治凝脂」に「点漆」にまつわる記事が収録されている。絵巻の作者が類書と原典以外の漢籍を通してこの表現に触れた可能性も低くないと言える。しかし、「点漆」以外の人物の目にまつわる描写や、先行研究の指摘を視野に入れると、やはり『太平御覧』を参照した可能性が高いように思う。

おわりに

本論文では、『土蜘蛛草紙』における漢文学の受容について、古家の週辺の風景描写、美女の登場場面及び目の描写を中心に検討してきた。

頼光の土蜘蛛退治譚は二種存在し、それぞれA系統とB系統とする。B系統の筋書きは軍記・謡曲・絵巻のジャンルで幅広く享受されているのに対し、A系統に属するのは『土蜘蛛草紙』のみである。この点から、従来『土蜘蛛草紙』は異本と位置づけられてきた。筆者は論文末尾の表二にA、B両系統の筋書を

並べ、先行研究と本論文で指摘された、『土蜘蛛草紙』の漢文学の取り入れが見られる点について説明を加えて網かけをした。その結果、『土蜘蛛草紙』特有の場面や、B系統の土蜘蛛退治譚と設定が異なる箇所の多くに、漢文学の取入れが見られることがわかった。漢文学が積極的に受容されていることが『土蜘蛛草紙』の大きな特徴であり、異本にさせた原因の一つだと言えよう。

さて、異界に住む者が延々と登場する『土蜘蛛草紙』の物語の運び方は、これまで「頼光対土蜘蛛の話としては筋が散漫で緊張味がない」、「話の結構は極めて単調でただ次々と色々の怪物が現はれて来るに過ぎない」とマイナスに評価されてきた^(註1)。表二で示したとおり、台所の老女、異形のものたち、尼公、美女が登場する場面と蜘蛛の妖怪のイメージに文学の受容が見られる。この点を考えると、『土蜘蛛草紙』特有のストーリーの展開方法は漢文学を取り入れるのにはむしろ好都合で、異界に住む者達の登場場面はすべて、絵巻の作者が漢文学の知識を織り込ませる場として認識を改めるべきではないだろうか。

[注]

- (一) 『土蜘蛛草紙』の紹介は、小松茂美編『続日本絵巻大成19 土蜘蛛草紙・天狗草紙・大江山絵詞』(中央公論社 一九八四)の解説に拠る。また本論文で引用した『土蜘蛛草紙』の本文は、全て横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』(角川書店 一九七三)に拠る。

(二) 黒田彰『剣巻覚書——土蜘蛛草紙をめぐる——』(『中世説話

の文学史的環境』(続) 和泉書院 一九九五)

- (三) 太田晶二郎『四部ノ讀書一考』(『太田晶二郎著作集』第一冊 吉川弘文館 一九九二)

(四) 須藤真紀氏の「土蜘蛛草紙」成立の背景をめぐる(『説話文学研究』37 二〇〇二年六月)、渡瀬淳子氏の「蜘蛛切」考——土蜘蛛説話の形成と漢籍(『古典遺産』53 二〇〇三年九月)に拠る。

- (五) 小松茂美編『続日本の絵巻26 土蜘蛛草紙 天狗草紙 大江山絵詞』の「土蜘蛛草紙」「天狗草紙」「大江山絵詞」——異類・異形の物語(中央公論社 一九九三)に拠る。

- (六) 小松茂美編『続日本絵巻大成19 土蜘蛛草紙・天狗草紙・大江山絵詞』(中央公論社 一九八四)の解説と、野村育世氏の「山蜘蛛から土蜘蛛へ」(『中世の内乱と社会』 東京堂出版 二〇〇七)で、「土蜘蛛草紙」が本来の題でない可能性が指摘された。

- (七) 表一における『土蜘蛛草紙』の段分けと各段の解説は、前掲『続日本絵巻大成19 土蜘蛛草紙・天狗草紙・大江山絵詞』の解説と「土蜘蛛草紙」「天狗草紙」「大江山絵詞」——異類・異形の物語を参照した。

- (八) 『和漢朗詠集』は小学館の新編日本古典文学全集19に拠り、『本朝文粹』は岩波書店の『新日本古典文学大系27』に拠る。『本朝麗藻』・『本朝無題詩』は『新校羣書類従』(内外書籍 一九三二)「文筆部」巻第一二七・一二八所収のものに拠る。

- (九) 謡曲の本文は、岩波書店の『日本古典文学大系40 謡曲集』(上)より引用した。

- (十) 佐久節『白楽天全詩集』 日本図書センター 一九七八

- (十一) 「琵琶引并序」の解説は、近藤春雄氏『長恨歌・琵琶行の研

究』明治書院 一九八一）第二章「琵琶行の研究」の第一節「琵琶行について」と、諸田龍美氏の「『琵琶行』の存在論——『漂泊の慨嘆』から『故郷の探究』へ——」（『白居易研究年報』第13号〈特集 琵琶行——』天涯淪落の歌』 二〇一二年一月）に拠る。

（十二）明治書院の新釈漢文大系17『白氏文集』（二下）に拠る。

（十三）天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編『類聚名義抄』（八木書店 一九七六）に拠る。

（十四）『遊仙窟全講』（明治書院 一九六七）より引用した。

（十五）古典籍索引叢書13『醍醐寺蔵本 遊仙窟総索引』 汲古書院

一九九五

（十六）本論文では『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』の本文は全て、小学館の新編日本古典文学全集より引用した。『小町集』は、注（八）の『新校羣書類従』『和歌部』巻第二七二所収のものに拠る。

（十七）室町期に「琵琶行」が読み広められる状況が『古文真宝』の流行と関係していることは、近藤春雄氏『長恨歌・琵琶行の研究』（明治書院 一九八一）第二章「琵琶行の研究」の第二節「我が国における琵琶行」と、同氏「我が国における白楽天——琵琶行の場合——」（『愛知県立女子大学説林』 12 一九六四年二月）で指摘されている。『古文真宝』の流布に関しては、芳賀幸四郎氏『中世禅林の学問および文学に関する研究』（思文閣出版 一九八一）第二篇「中世禅林の文学」第二章「大陸文学の鑑賞と研究」の第二節「詩集・文集」を参照した。

（十八）竜門文庫本及び京大本の書写年代は全て、阪本龍門文庫複製叢刊四『長恨歌并琵琶行 清原宣賢筆』（龍門文庫 一九六二）

の川瀬一馬氏の解説に拠る。

（十九）瀧澤安隆「清原宣賢筆『長恨歌并琵琶行秘』について」『東洋大学大学院紀要』 39 二〇〇二年一月

（二十）注（十八）同様、川瀬一馬氏の解説に拠る。

（二十一）竜門文庫本の本文と訓法は阪本龍門文庫複製叢刊四『長恨歌并琵琶行 清原宣賢筆』にて確認することができる。京大本は国田百合子編『長恨歌・琵琶行抄』（武蔵野書院 一九七六）と岡見正雄博士還暦記念刊行会編『室町ころ』（角川書店 一九七八）にて、本文の影印が掲載されているほか、「京都大学附属図書館蔵『長恨歌并琵琶行秘』翻刻」（『東洋大学大学院紀要 文学研究科』 21 一九八五年二月）にて全文が翻刻されている。

（二十二）京大本では「抱^{イデ}テ」の「テ」に当たる訓点が付されていない。

（二十三）築島裕編『訓点語彙集成』（汲古書院 二〇〇七）によれば、前田育徳會影印本『日本書紀』（古紀傳点・院政期）で、「翳」の字が「サシカクス」と訓読されている。なお、本論文では小学館の新編日本古典文学全集3『日本書紀』二より本文を引用した。

（二十四）高山寺典籍文書綜合調査團編『高山寺古訓點資料』第三東京大學出版會 二〇〇三

（二十五）明治書院の新釈漢文大系78『世説新語』（下）に拠る。

（二十六）明治書院の新釈漢文大系59『蒙求』（下）に拠る。

（二十七）『藝文類聚』 上海古籍出版社 一九八二

（二十八）『初学記』 中華書局 一九六二

（二十九）『太平御覽』 中文出版社 一九八〇

（三十）平安時代における『世説新語』の享受に関しては、今浜通隆

氏の以下の論考に詳しい。

「平安朝文学と『世説』」(一)「並木の里」 21 一九八一年十月
「此の君」 雑考——平安朝文学と『世説』序章——『和歌文学とその周辺』 おうふう 一九八四

「平安朝文学と『世説』」(二)「日本文学研究」(梅光女学院大学)
17 一九八九年十二月

「仁和元年二月二十五日 基経邸読書始について」(上)——平安朝文学と『世説』其三「武蔵野日本文学」 2 一九九三年三月
「仁和元年二月二十五日 基経邸読書始について」(下)——平安朝文学と『世説』其三「講座平安文学論究」 9 一九九三年十一月

「日と都といづれぞ遠き」考(上)——平安朝文学と『世説』
「武蔵野日本文学」 7 一九九八年三月

「日と都といづれぞ遠き」考(中)——平安朝文学と『世説』
「武蔵野日本文学」 8 一九九九年三月

「日と都といづれぞ遠き」考(下)——平安朝文学と『世説』
「武蔵野日本文学」 9 二〇〇〇年三月

「日と都といづれぞ遠き」考(統一)——平安朝文学と『世説』
「武蔵野日本文学」 11 二〇〇二年三月

「日と都といづれぞ遠き」考(続一)——平安朝文学と『世説』
「武蔵野日本文学」 12 二〇〇三年三月

「日と都といづれぞ遠き」考(続三)——平安朝文学と『世説』
「武蔵野日本文学」 13 二〇〇四年三月

(三十一)『実隆公記』 続群書類従完成会太平洋社 一九五八

(三十二)田中一松氏は『日本絵巻集成』二(雄山閣 一九二九)「土蜘蛛双紙」で、『土蜘蛛草紙』を以下のように位置づけている。

(前略) 頼光の土蜘蛛退治は普通は謡曲にある結構の物語として知られ亘っているが、此の絵巻の如きは全く話の筋が違つてゐる。(中略) この物語の系統は頼光が病床で切りつける話といかなる関係にあるのか、この間の消息について解釈を下すだけの材料を知らぬが、之と同類の説話があり見当たらないので察すれば、頼光対土蜘蛛の話としては筋が散漫で緊張味がないので多く行はれなかったものであろうか、それだけにまた土蜘蛛説話の一異本として珍重すべき価値があらう。(略)

また、同氏は『土蜘蛛草紙』の内容について以下のように評価している。

(前略) この話の内容を読んでもあきらかなやうに所謂お伽双紙風の特徴が顕著である。話の内容は妖怪退治といふ物凄いのであるが、話の結構は極めて単調でただ次々と色々の怪物が現はれて来るに過ぎない。(中略) これ等はいづれもあまり凄味の多いものではなくてまるで見世物小屋をのぞくやうな面白みに過ぎない。且つこれ等の怪物の相互関係についてもさっぱり説明がなく、至つてのんきな書き振りである。(略)

(はく けい・本学大学院文学研究科博士後期課程)

表一

段数	内容	漢文学の受容に関する先行研究の指摘
第一段	源頼光と渡辺綱は蓮台野で空を飛ぶ。髑髏を見かける。それを追って神楽岡の古家に至る。	
第二段 (詞書欠失)	頼光、古家の奥の間に髑髏の眠るを見る。あたりに生首が散乱する。	
第三段	頼光、台所の間において異様な老女と出会い、身の上話を聞かされる。	老女の台詞に『和漢朗詠集』、「新楽府」第七首「上陽白髮人」、「琵琶引并序」の受容が見られる。 ● 『和漢朗詠集』の受容 ● 「歳去歳来りて、恨のみ切なり」↓「上、夏、蟬」「歳去歳来聴不變」 ● 「新楽府」第七首「上陽白髮人」 「春往秋来れとも、思ひはあらたまらず」↓「春往秋来不記年」、「わかきはさるといへとも、老てみつからののころうらめしきかな」↓「同時採擇百餘人、零落年深殘此身」、「宮の鶯すますなり、うつはりのつはくらめ、とをさかる事をなけく」↓「宮鶯百轉愁厭聞、梁燕双栖老休妬、鶯婦燕至情悄然」 ● 「琵琶引并序」の受容 「君を見たてまつるは、長安昌家のむすめ、元和の白樂天にあへるこゝちす」↓「元和十年、予左遷九江郡司馬」・「問其人、本是長安倡家女」、「江のうへにかふ月を見ることに」↓「唯見江心秋月白」、「枕の上につもる涙をかなしむ」↓「夢啼粧淚紅闌干」
第四段	日が暮れて、異形のもの達が頼光の前に現れる。	
第五段	頼光、異様な尼公に会う。	尼公の「道州民のことし」という外見は、「新楽府」の第十五首「道

第六段	暁方、頼光のもとに、山蜘蛛が化けた美女が現れる。				州民」を踏まえており、「面三尺」という巨頭造型は『和漢朗詠集』「下、雑、將軍」「雄劍在腰拔則秋霜三尺、雌黄自口吟亦寒玉一声」の国会本朗詠注で描写された眉間尺の容貌が取り入れられた結果である。
第七段	美女、豹変して頼光を襲うが、頼光に切り付けられ、姿を消す。				「鶏人あかつきを唱へて、忠臣あしたを待程になりぬれば」という情景描写は、『和漢朗詠集』「下、雑、禁中」の「鶏人曉唱」と「上、春、鶯」の「忠臣待旦」を踏まえている。
第八段	美女を切った頼光の太刀の先が折れる。頼光と綱、血の跡を辿って洞窟に行き着く。				美女の外見についての、「楊貴妃・李夫人」 あらそふほとのかたちなれば」という評価は、「長恨歌」と「新樂府」第三十六首「李夫人」に拠る。
第九段	頼光、綱の忠告に従い、人形を作った山蜘蛛に立ち向かう。山蜘蛛、折れた剣先を頼光らに投げかけて攻撃する。				綱の「御剣さきのをれやうを見るに、楚国のみけむさく、しかうを思て、雄劍のさきをあつるにたかはす」という忠告は、『和漢朗詠集』「下、雑、將軍」の「雄劍在腰拔則秋霜三尺、雌黄自口吟亦寒玉一声」を踏まえた文辞である。そればかりでなく、対決場面の山蜘蛛が折れた剣先を頼光らに投げかけて攻撃するという筋書には、この句の注釈で語られた「眉間尺譚口中劍条」を取り入れた痕跡が窺える。
第十段	頼光主従、ついに山蜘蛛を退治する。その後、かの場所に火をかけて焼き払った。				中世以前まで希薄だった妖怪としての蜘蛛のイメージが形成される過程で、中国の類書から影響を受けた可能性が高い。また、頼光と綱の火を放つ行動は、中国の化け蜘蛛退治譚のパターンに倣った可能性があることが指摘された。

表二

A系統 『土蜘蛛草紙』	● 源頼光と渡辺綱は蓮台野で空を飛ぶ髑髏を見かける。それを追って神楽岡の古家に至る。 ● 古家周辺の風景描写 ● 頼光、古家の台所の間において異様な老女と出会い、身の上話を聞かされる。 老女の台詞 ● 日が暮れて、異形のものたちが頼光の前に現れる。 ● 頼光の光る目が妖怪たちを撃退する筋書 ● 頼光、異様な尼公に会う。 尼公の外見描写 ● 暁方、頼光のもとに、山蜘蛛が化けた美女が現れる。 ● 「鶏人あかつきを唱へて、忠臣あしたを待程になりぬれは」という情景描写、美女が登場する際の仕草と外見描写 ● 美女、去り際に豹変して頼光に襲い掛かるが、頼光に斬られて姿を消した。 豹変する際の目の描写 ● 頼光、美女を切った後の板敷に突き刺さった太刀を抜くと、剣先が折れていた。頼光と綱、血の跡を辿って洞窟に行き着く。綱、太刀が折れたことから、眉間尺口中剣譚を思い出して頼光に人形を作るよう提案する。 綱の台詞 ● 山蜘蛛、折れた剣先を頼光らに投げかけて攻撃する。 ● 対決場面の筋書き、蜘蛛の妖怪のイメージの形成 ● 頼光主従、ついに山蜘蛛を退治し、かの場所に火をかけて焼き払った。 頼光と綱の火を放つ行動
B系統 (「剣巻」・謡曲『土蜘蛛』・慶大本『土くも』)	● 頼光、病に倒れ、医師や陰陽師が力を尽くしても回復しない。 ● ある日、頼光の病床に謎の法師が現れる。 ● 法師に襲われた頼光は、近くに置いてあった剣で切り付ける。法師、姿を消す。 ● 騒ぎに入ってきた家来らは、残された血の痕を辿って妖怪の棲み処に着く。 ● 家来ら、妖怪を捉え、退治する。